

北っ子 敷島北小学校だより

令和5年10月12日 文責 学校長 増坪広夫

全力を出しきった運動会

運動会練習中は熱中症予防に翻弄されましたが、当日は曇り空の涼しいコンディションのもと、通常日程で運動会を開催することができました。「燃えろ！北っ子，勝利の旗をつかみとれ」のテーマのもと、6年生を中心に競技や係活動等、全校が一丸となって取り組めた運動会でした。最終得点は「赤34点」「白26点」で、赤組の優勝となりました。団結して全力を出し切った子どもたち。すばらしい活躍でした。最後の運動会でリーダーシップを発揮した6年生や初めての運動会に張り切って参加した1年生をはじめ、子供たち全員が運動会を通して一回り大きく成長してくれたことと思います。

保護者の皆様には、温かい励ましの声援や片付けなどにも御協力いただき、改めて感謝申し上げます。



未知を既知に変える

運動会が終わり、早いもので学校の教育活動も半分が過ぎたこととなります。思えば学校がスタートしたばかりの4月頃では、学級の役割やルールを定着させる忙しい日々を送っていました。特に小学校は「まるごと見る」という発想があり、給食の配膳から掃除のやり方などの指導も含め、そうした些細なことも大切な教育内容のひとつとなっています。



これは日常生活だけではなく運動会の係活動などでも同じことがいえます。「〇〇時、どんな〇〇をするのか」「仕事が早く終わった人は何をすればよいのか」「途中の〇〇は誰がするのか」など、これらのことを事前に何度も練習し、それら一つ一つについて担任や担当が、時間をかけて丁寧に子供たちと確認をしてきました。そうした積み重ねが今回の運動会では、多くの場面で役立っていたように思えます。不測の事態が起こっても、これまで練習してきたことを既知とすることで知恵を絞り、「未知を既知に変える」ことで大きなトラブルもなく、運動会を成功させることができました。

「弱いから負けるのではない、負けるから弱くなるんだ」

これは相撲の二子山親方の言葉です。本校の運動会は赤組がここ数年、連勝が続いています。本番当日にも話しましたが「赤組は連覇で偉業を残そう」「白組は常勝を止め歴史に名を残そう」と伝えました。

残念なことですが、子どもたちの中には最初から勝つことを「あきらめてしまっている」子がいます。「あきらめる」背景には、失敗を重ねることによって劣等感を持ち、それが貧しい自己イメージとして育ってしまったことがあるかもしれません。子供に劣等感をもたせるのは簡単です。テストの結果や成果を報告したとき「あら探し」をして厳しく批判すればいいだけです。ただ「気づきを与える」のも教育だとも考えています。言われた時には苦しく感じる厳しい批判も、後になって考えてみると自分自身の大きな成長のきっかけになっていることも多いからです。



敷島北小学校では、子供自身の自尊感情をいかに高めていくかということを大切に考えています。担任はもちろんですが、担任以外が積極的に子供の良さを見つけて声かけをするよう努めています。これからも「自分を大切に考え、愛おしく思う気持ち」を育てていきたいと思えます。

自尊感情を育てる

昔から「七つほめて三つしかれ」と言われるように、「褒めて伸ばす」指導がよいとされています。

しかし、まわりや自分のことを振り返ると、日本人というのはどうもこの「ほめる」ことが下手なように思えます。よく身内の紹介をするときに「出来が悪い〇〇で・・・」と言ってから会話をすることがありますが、時として「悪く言うこと」が美德だと考えられているのではないかと思う節さえあります。



外国の映画などを見ると、親が自分の子供を「こんなところが素晴らしい」といったことを話す場面を目にします。とても良い習慣だと思えました。ほめられて悪い気がする人はいないからです。

また、「ほめる」ことで良い自己イメージを持つことが出来るようにもなります。家族同士ではちょっと照れくさい面もあるかと思いますが、まずは身近なところから、運動会で成長したお子さんに賞賛の声かけをお願いします。